

2018年12月18日 Bグループ 北尾

山家悠紀夫『景気とは何ろうか』岩波新書 2005年

## 第6章 不良債権と景気

### 問題提起

「不良債権処理の促進という政策は景気を悪くさせる力を日本経済にかけ続けてきたし、現在もかけている。にもかかわらず、景気を良くする力が強くなっているがゆえに、景気は良くなってきたということである。」(P178, L4) とあるが、不良債権が大量に存在し、不良債権処理の政策が行われている中、なぜ景気が良くなったのか。

#### 選んだ理由

不良債権処理は企業倒産の増加、失業者の増加、また銀行経営をも厳しくするなど、要するに景気を悪くすると考えられるのに、不良債権が減ってきて、銀行貸出は抑えられたままであり、にもかかわらず、投資は増加し景気がよくなっていたという事実があるなど反対に景気が良くなった。それには何らかの理由やきっかけがあったのではないかと思ったから。

#### D グループ

不良債権処理自体に景気を良くする力はなく、それとは無関係に 2002年からアメリカ、中国経済の好調により日本の輸出が著しく増加し始め、それに伴い 2003年には企業投資が回復した。これらの外部要因による景気拡張が政策による景気の悪化を上回ったから。

#### C グループ

不良債権処理に景気を良くする力はなく、外部経済の影響により景気が良くなり、その結果として不良債権が減り、正常債権化した。

#### B グループ

不良債権処理の政策が景気を悪化させるマイナスの力よりも、輸出増から企業投資増という 外部の力と、それを受けての市場の景気回復の力とがかろうじて上回っていたため。

#### A グループ

海外の経済が回復したことが日本経済に影響し、投資や消費が伸びた。その力が、不良債権処理という景気を悪くさせる力よりも大きかったため景気が回復したと考える。